

十巻本「高野大師行状図画」の写本について—延暦寺本を中心に—

塩 出 貴美子

一 十巻本「高野大師行状図画」の諸本

高野大師こと弘法大師空海の伝記を表した絵巻には、種々の作品があり、それらは内容や巻数の相違によって、次の五系統に分類されている。^①

- ① 高祖大師秘密縁起 十巻
- ② 高野大師行状図画 六巻
- ③ 高野大師行状図画 十巻
- ④ 弘法大師行状絵詞 十二巻
- ⑤ 高野大師行状図画（版本） 十巻

本稿で取り上げる十巻本は、このうち③の系統に当たるが、これについては既に、②の増補本であること、また④⑤の成立に影響を及ぼしたことが明らかにされている。^②

この十巻本の系統は、⑤の版本を除くと、最も多く流布したものであり、比較的多くの作品が知られる。長谷宝秀氏の「弘法大師絵伝目録」には、完本、あるいは完本に近いものとして、元応元年（一三二

九）の年記を持つ高野山惣持院本をはじめとし、同親王院本（年代不明）、大蔵寺本（延徳二年、一四九〇）、宝集寺本（永正三年、一五〇六）、随心院本（江戸初期）、高野山桜池院本（安永十年、一七八二）が挙げられている。^③ただし惣持院本は同目録作成時には紛失しており、その模本とされる親王院本も現在は所在不明である。その後、新たに延暦寺本（応永十四年、一四〇七）、金剛福寺・久保家分蔵本（応永二十二年、一四一五）の存在が紹介され、さらに白鶴美術館本（元応元年、一三一九）の全巻写真が公刊された。^④特に白鶴美術館本は、現存作品の中で最も古い年記を持つ点で、また惣持院本と同じ筆者目録を備えていることから、紛失した惣持院本そのものである可能性が指摘されている点で、極めて重要な作品である。^⑤

さて、十巻本の諸本については、最近、鹿島藩氏が詞書と図様の比較という見地から分類を試みられ、「直接転写を示す分類ではない」とされた上で、次のように結論された。^⑥

第一種 旧三大寺本・ポストン美術館本

第二種 地藏院本（六巻本系統）↓白鶴美術館本

第三種 延暦寺本↓宝集寺本

第四種 金剛福寺・久保家本↓大蔵寺本

右の分類は一応首肯できるものであり、本稿はこれに異論を唱えるものではない。しかし、個々の作品についても、それらの相互関係についても、まだ十分に論じ尽くされたわけではない。そこで本稿では、文明六年（一四七四）の年記を持つ新出本（京都市個人蔵）の紹介をかねて、改めて十巻本の諸本について一考を試みることにしたい。

なお鹿島氏が第一種に分類した三大寺家旧蔵本・ポストン美術館本は、十巻本の中では孤立した異本的存在であり、これについては別稿で論じる。また第二種の二本については、既に言及したことがある。ここでは、残る第三種と第四種の作品を検討するが、金剛福寺・久保家分蔵本は、現在、所在不明となっており、内容の確認ができなかつたので除外する。また長谷氏の目録の中には、江戸時代の作品が二点含まれているが、今回は室町時代のものに限定するため省略する。したがって本稿で考察の対象とするのは、次の四点である。

延暦寺本 十巻 応永十四年（一四〇七）

個人蔵本 十巻 文明六年（一四七四）

大蔵寺本 十巻 延徳二年（一四九〇）

宝集寺本 九巻（第五巻欠） 永正三年（一五〇六）

考察に当たっては、まず諸本の概要を一覧する。次に、四点の中で是最古の作品となる延暦寺本を取り上げ、その図様を白鶴美術館本と比較する。最後に、右の結果を踏まえて他三点の図様を検討し、作品相互の関係を論じることにはしたい。

一一 諸本の概要

（一）延暦寺本

滋賀県大津市延暦寺の所蔵品で、最近まで叡山文庫に保管されていたが、現在は東塔の国宝殿に収蔵されている。十巻が完存するものとしては、現存作品中最古のものである。錯簡が二箇所あり、一つは第三巻の第二紙すなわち第一段「渡天札拝釈尊事」の詞の途中に、第八巻第七段「皇嘉門額事」の絵の後半部が竄入する。もう一つは、第三巻第九段において詞と絵が逆順になっている。

第十巻の巻末に次の奥書がある（図一）。

「右此十巻絵、奉為大師報恩、所書

写也。縦雖有借用之事、不可出於他所

者也。後見人々、可唱十念給耳。

応永十四年丁亥九月廿一日、願主成仏院当住用阿。

執筆慶阿。

画工仙阿。」

図1 延暦寺本 第十卷奥書

これにより、本絵巻は

(一) 個人蔵本

成仏院の用阿が大師への報恩のために書写させたもので、たとえ借用の申し出があっても他所へ出すことは禁じていたこと、詞は慶阿が、また絵は仙阿が書写したこと、完成したのは応永十四年(一四〇七)九月であったことが知られる。用阿、慶阿、仙阿については、三人とも阿弥号であることが注目されるが、何れ

京都市の個人が所蔵されるもので、これまで紹介されたことのない作品である。第二卷第七段の絵から同第八段の詞にかかる部分の料紙二枚を欠失するが、そのほかは完存する。第七卷第七段「秘鍵解題事」と同第八段「権者自称事」の絵が入れ替わっているが、これは錯簡ではなく、製作時における錯誤によるものである。

図2 個人蔵本 第一卷奥書

と、詞は慶阿が、また絵は仙阿が書写したこと、

第一卷の巻末に次の奥書がある(図2)。

「西光院之内光福院惣常住也。」

また、第十卷の巻末に次の奥書がある(図3)。

図3 個人蔵本 第十卷奥書

完成したのは応永十四年(一四〇七)九月であつたことが知られる。用阿、

「于時文明五年九月十八日、レ図画書写令始行之。レ

同六年甲午九月廿一日、功終畢。

画像筆者大館殿

紹正。

文字筆者賢頂房

良宥。」

も不詳である。成仏院については、十巻本には惣持院本など高野山に關係するものが多いことを考え合わせると、一つの可能性として高野山内の成仏院(後の宝城院)が挙げられるが、確証はない。

絵は大和絵の伝統を引くものであり、仏菩薩には金泥を塗るなどの細やかさを見せるが、白鶴美術館本に比べると、筆致も彩色も粗略であることは否めない。料紙の表面が傷んでいるために、文字がかすれ、彩色の剥落した箇所があるのが惜しまれる。

第十卷の奥書は一部抹消されているが、わずかに残る字形から、その内容は第一卷の奥書と同じであると推定される。これにより、本絵巻は西光院内の光福院の所蔵品であり、文明五年(一四七三)九月から翌六年九月までの一年間で製作されたこと、絵は大館殿紹正が、詞は賢頂房良宥が書写したことが知られる。紹正、良宥については不詳である。西光院については、やはり高野山の西光院谷、あるいは高野

図4 大蔵寺本 第一巻奥書

山往生院谷の西光院が注目されるが、何れにしても光福院については知るところがない。

絵は第一巻第五段までは大和絵であるが、それ以降は大和絵に水墨画を加味したような画風に変わり、岩や樹木の墨皴が強調される。奥書には紹介が一人で描いたとあるが、はじめの五段は別筆の可能性が高い。白鶴美術館本に比べると粗略になつてはいるが、人物表現は的確であり、水流にも巧みな波形が表されている。第九巻第七段「大師号事」に見られる水墨の荷葉図屏風も興味深い。

(三) 大蔵寺本

奈良県宇陀郡大蔵寺の所蔵品である。十巻が完存し、錯簡もない。第一巻の巻末に次の奥書がある(図4)。

「夫、大師之利生広播奇特於三国、厥高貴之行状具呈図画於十軸。適披覽之輩

必列三會之法筵、僅聽聞之人当生九品之淨

刹。若為見聞結縁、暫雖許借用於院中、

不可出此本於門外。堅守奇進志趣之挺、末

代可為当院重宝耳。

奉寄附称名院御宝前高野大師行状記一部拾卷。

右奉施入者、天翁道繼禪定門、賀屋妙慶禪定尼。

于時延徳二稔庚戌五月吉日、施主敬白。

仁和寺真乘院 権僧正法印大和尚位覚遍。

第十巻の巻末にも同文の奥書があり、また第二巻から第九巻の巻末には、右の末尾四行にあたる部分が繰り返されている。製作事情を伝えるのはこの部分であり、これにより、本絵巻は道繼と妙慶が施主となつて延徳二年(一四九〇)五月に称名院に寄進したものであること、偈題と奥書は仁和寺真乘院の覚遍が書いたことが知られる。道繼と妙慶、称名院については不詳である。また詞書と絵の筆者については何も記されていない。

絵は大和絵の伝統を引くもので、人物の輪郭は細線で丁寧な描かれ、

図5 宝集寺本 第一巻奥書

衣服にも細やかな文様が描き入れられている。しかし、背景となる風景には太く抑揚のある描線を多用し、特に岩の描写にその傾向が顕著である。

図6 宝集寺本 第十巻奥書

図7 宝集寺本 第四巻筆者目録

(四) 宝集寺本

石川県金沢市宝集寺の所蔵品である。第五巻を欠失するが、他九巻は完存し、錯簡もない。

第一巻の巻末に次の奥書がある(図5)。

「永正三年丙寅九月廿一日。

出羽國山北雄勝郡冶館菩提寺住侶律僧

宗賢房圖書之。聽而被歸國、畢生。年廿八歳。

文字者永舜書寫之。爲令法久住也。

本願經智坊永舜房成快。」

また、第十巻の巻末に次の奥書がある(図6)。

「出羽國山北雄勝郡冶館菩提寺之

住侶小比丘弘演、假名宗賢、生年

廿八歳、法年八歳。凡喜見雖臻參詣

靈地、深祕之殊勝感、山中乞食而三ヶ年、

雖母其功、徧欲析出離、時々邊堂こゝろ小縁。

圖書彼記、併奉たづね凭當來御引攝者也而已。

永正三年丙寅九月廿一日。

高野山一心院於五坊經智坊、文字如形

染秋毫。右筆成快永舜、送春秋六十二歳。」

これにより、絵の筆者である宗賢房弘演は、本絵巻を描いた後、出羽国に帰り二十八才で亡くなった

こと、詞は高野山一心院谷の五坊経智坊において永舜房成快が書写したこと、本絵巻は永正三年（一五〇六）九月に完成したことなどが知られる。なお第十巻の奥書の後には「一帝王高野山御幸之事」と題する貼紙があり、寛治二年（一〇八八）の白河院から正和二年（一二三二）の御（後）宇多院まで、計九回の御幸の年月日が列記されている。

また、第四巻の巻末に次の筆者目録がある（図7）。

「高野大師御繪詞執筆人々
（中略）」

絵師金岡末葉左衛門尉光康子息有康。

右依為惣持院重宝、輒不可出寺内者也。

元応元年己未八月 日。」

これにより、本絵巻は惣持院所蔵の原本から派生した写本であることが知られる。この筆者目録は「弘法大師絵伝目録」所載の惣持院本とその模本である親王院本に記載されていたものと全く同じであり、本絵巻の「惣持院」が高野山の惣持院を指すことは明らかである。また白鶴美術館本第一巻の巻頭にも同じものがある⁽¹¹⁾。白鶴美術館本が惣持院本そのものである可能性を持つことは先に述べたが、その当否は保留するとしても、白鶴美術館本と宝集寺本が同系統に属する作品であることは間違いない。ところが、上述の延暦寺本、個人蔵本、大蔵寺本には、この筆者目録は見あたらない。したがって、宝集寺本をこれら三本に直接的に結び付けることは不可能であると思われる。

他本は何れも詞書に漢字交じりの平仮名文を用いるが、本絵巻は漢文調が強く、送り仮名に片仮名を用いる点¹²が異色である。絵は大和絵の技法により丁寧¹³に描写されているが、岩や樹木には墨っぽい表現が見られる。

三 延暦寺本の図様—白鶴美術館本との比較—

次に、右で一覽した四点の中から、制作時期が最も古い延暦寺本を取り上げ、白鶴美術館本の図様と比較してみよう（図9、26は延暦寺本⁽¹²⁾）。

例えばI—1「誕生事」（ローマ数字は巻、算用数字は段を表す。以下同。）を見ると、屋形の門・母屋・馬小屋の配置をはじめ、庭木とその枝に止まる鶏、母屋の中で眠る大師の両親、その夢の中に現れた僧形の聖人、さらには別室の二人の武士に至るまで、各モチーフには強い相似性が認められる。延暦寺本の図様（図17）が白鶴美術館本の系統に連なるものであることは一目瞭然である。しかし厳密に言えば、延暦寺本は大師の父を描いていない。また縁側の犬も描き落としており、他にも細部に微妙な異同が認められる。

ここでは、このような両者の異同を明らかにするために、図様の対応関係を次の三種に分類し、順次検討を加えることにしたい。

A 場面の内容に関わる異同があるもの

表1. 白鶴美術館本と延暦寺本の
図様の対応関係

X	IX	VIII	VII	VI	V	IV	III	II	I	巻 段
C	B ₂	B ₂	C	C	B ₁	C	A	C	B ₁	1
C	B ₂	C	C	B ₂	A	B ₁	A	C	C	2
C	B ₂	C	C	C	C	C	C	B ₂	B ₂	3
B ₁	B ₂	B ₂ ¹ / ₂	C	C	C	C	B ₁	B ₂	C	4
B ₂	B ₂	B ₂	B ₂	B ₂	C	B ₂ ¹ / ₂	C	C	B ₁	5
A	C	B ₂	B ₁	C	B ₂	C	B ₂ ¹ / ₂	B ₂	C	6
	C	C	B ₂	C	A	B ₂	C	C	C	7
			B ₂	C	C	B ₂	B ₂	B ₁	C	8
			B ₂		C		B ₂		C	9
			C	C	C				C	10
			B ₂	C	C				A	11
				C	C					12

・VI-9は白鶴美術館本の絵欠。

点に注目し、B₁に分類した。
分類の結果は表1の通りである。ちなみに「誕生事」は、一見するとCのようであるが、大師の父という重要なモチーフが欠落している

- C 基本的な図様がほぼ一致するもの
- 2 周辺モチーフに関するもの
- 1 主要モチーフに関するもの
- 同があるもの
- B 場面の内容には関わらないが、図様の一部に比較的顕著な異

(二) 図様比較A

場面の内容に関わる異同があるものは、次の六段である。

I-11 「明星入口事」(図8・9) 大師の口に明星が入るとい
奇瑞があり、海に吐き出すと金色の光が残ったという事蹟を表す段で
ある。白鶴美術館本は、画面右に山中の岩屋にいる大師(①)を、左
に浜辺の住房にいる大師(②)を描

図8 白鶴美術館本 I-11 明星入口事

に表された小円は明星を示すものであり、②に入口と吐出の場面が重ね合わされていることがわかる。一方、延暦寺本も同様に大師を二回描くが、明星を示す小円はなく、かわりに画面下方に広がる海の中の、ちょうど①②の中間あたりにある岩の陰から放射状に発する光を描く(図9)。これは海に残ったという金色の光である。ここで①の内容に注目すると、白鶴美術館本では、明星入口の前に語られている諸処での修行を表すものと解される。ところが延暦寺本では、金色の光を見ているのは実は

①であり、②は逆の方向を見ている。したがって画面上では、①が明星を吐き出した後で、②は明星とは無関係のように見える。延暦寺本では、明星の表現に生じた異同が、このように場面本来の意味を変質させているのである。

Ⅲ―1「渡天礼拝釈尊事」(図10) 在唐中の大師が神童に勧められ、白馬、青羊、飛車を乗り継ぎ、老翁に出会った後、鉢に導かれて靈山(靈鷲山)に至り、釈迦の真容を拝するという事蹟を表す段である。白鶴美術館本は以上の行程を逐次的に絵画化する。延暦寺本も同様であるが、鉢に導かれる場面に大師の姿がない。しかも老翁より左に描かれるべき鉢を、右にある飛車の前方に描いているので、まるで飛車が鉢に先導されているかのように見える。恐らくは転写の際に大師を描き漏らしてしまい、その結果、意味が分からなくなってしまう。鉢を、転写を重ねる際に飛車の先導役に仕立ててしまったのである。そう考えると、白鶴美術館本と延暦寺本の間には、少なくとも一本の写本の存在が想定される。

Ⅲ―2「大師御入壇事」(図11) 大師が惠果から灌頂を受ける段である。白鶴美術館本では、僧列に先導されて堂に向かうのは惠果一人であり、そこに大師の姿はない。ところが、延暦寺本は主役不在の画面に飽き足らなかつたらしく、惠果の後ろに大師を描き加えている。また列に加わる僧の数も十人ほど増え、莊重さが加わる。

V―2「稻荷契約」(図12) 柴守長者(稻荷大明神の化身)が東

寺に大師を訪ねるといふ事蹟を表す段である。白鶴美術館本は、①大師が長者を出迎えるところ、②供応するところ、③東南の山へ案内するところ、以上三場面を右から②①③の順に描く。さらに③の左方に、既にできあがった社殿を配するが、延暦寺本は①を省略した構成をとる。その結果、右から左へ展開するだけのすっきりした構成になったと言えるが、それが意図的な変更であったのか、あるいは単なる遺漏であったのかは判然としない。

V―7「南円堂鎮」(図13) 興福寺南円堂の側に塔を建てる時、地中から金銅の筥が掘り出されたといふ事蹟を表す段である。白鶴美術館本は、①地を掘るところ、②筥を運ぶところ、以上二場面を描く。延暦寺本も同様であるが、白鶴美術館本の①で人夫たちを指揮していた男に対応する人物の手に、既に筥が持たれている点に相違がある。すなわち白鶴美術館本の①は筥の発見前を表しているのに対し、延暦寺本では発見後が表されているのである。内容的には大差ないが、時間的な差に注目してAに分類した。

X―6「高野山臨幸」(図14) 白河院の高野山臨幸を表す段である。白鶴美術館本は、画面上を右から左へ進む行列と僅かな遠山を描くだけの簡潔な構成である。延暦寺本も同様の場面を描くが、その前に川の流れと伽藍などの風景を添え、後には高野山の大門から奥院に至る風景を展開させる。そして大門前には主のいない輿と休息する輿丁たちを、門の内には白河院の一行が列を整えているところを描き添

延曆寺本

〔高野大師行状図画〕

図9 I-11 明星入口事

図10 III-1 渡天礼拝釈尊事

図11 III-2 大師御入唐事

図 12
Y—2 稻荷契約

図 14
X—6 高野山臨幸

圖 22
VII—6 大塔建立事

圖 23
IV—7 高雄灌頂事

図
25

VII—8
權者自稱事

図
26

II—1
天狗問答事

える。すなわち延暦寺本は第二場面を追加したことになるが、それだけでなく、高野山そのものを描くことにも重点を置いていたように思われる。

さて、以上の六例については、I—II「明星入口事」は特定のモチーフの表し方に異同が生じるもの、III—I「渡天礼拝釈尊事」とV—2「稻荷契約」は、延暦寺本が白鶴美術館本の図様の一部を欠落するもの、逆にIII—2「大師御入壇事」とX—6「高野山臨幸」は、延暦寺本が白鶴美術館本の図様に他のモチーフを追加するもの、そしてV—7「南円堂鎮」もこれに準じるものと見ることが出来る。その中には、過失と思われるものもあれば、故意に変更したと思われるもの、また何れか判断し難いものもある。しかし六例に共通して言えるのは、それらの異同は何れも図様の一部に留まっており、全体的に見れば、延暦寺本の図様は、やはり白鶴美術館本を基調としたものであるという事である。

(二) 図様比較 B

次に、場面内容に関わるほどではないが、図様の一部に比較的顕著な異同がある例を見てみよう。1の主要モチーフとは、場面の内容に直接的に関わる人物や事物、例えば大師や大師が会う人々などである。それ以外の従者や見物人などは、周辺モチーフとして2に分類する。なお、背景となる建物や風景も周辺モチーフであるが、そこに生じた異同は挙げれば際限がないので、原則として無視する。B1の例は十

一段あり、そのうち三段はB2と重なる。その三段を含めて、B2には二十八段が該当する。

まず、B1の例から検討する。IV—5「宗論事」(図15)は、清涼殿での論争の際に大師が即身成仏を顕現したという事蹟である。その時の大師の姿を、白鶴美術館本は大日如来そのものとするが、延暦寺本は宝冠を戴く僧形で表す。また、白鶴美術館本では大師を礼拝する僧は四人であるが、延暦寺本は七人とする。詞書には「比丘の頭の上五智宝冠あらはれ(中略)七宗の諸徳地に下りて拝謝」とあるので、延暦寺本の方が詞書に忠実な図様であると言える。ただし七僧はまだ殿上にあり、地に下りていない。またV—1「八幡約諾」(図16)は、大師が東大寺の中門で八幡大菩薩に会うという事蹟である。白鶴美術館本は八幡大菩薩を直衣姿の俗人とするが、延暦寺本は僧形で表す。この場合も、延暦寺本の方が適切な図様であるように思われる。右の二例は、延暦寺本が教義的な見地から主要モチーフに修正を加えたものと推定される。

I—1「誕生事」(図17)が大師の父を描いていないことは、前述の通りである。またIII—4「守敏遣護法事」(図18)の後半は、伝法を盗聴しようとした護法が大師の結果のために近付くことができなかつたという場面であるが、延暦寺本は白鶴美術館本にある護法の引き返す姿を描いていない。逆にVIII—4「二間修法事」(図19)では、白鶴美術館本は大師の姿を御簾の中に隠すが、延暦寺本は御簾を上げて

大師を表す。以上三例も主要モチーフの表現上の異同であるが、先の二例よりは単純なものと言えよう。

次に、構図に注目すると、Ⅳ―2「賀春山生木」(図20)では大師自身が左右反転し、Ⅰ―5「明敏篤学事」の第二場面では大師と岡田博士の位置が入れ替わり、Ⅱ―8「虚空普字事」でも大師と童子の位置関係に変化が見られる。またⅢ―6「惠果御入滅事」では、白鶴美術館本は大師を惠果の足元に配するが、延暦寺本のこの部分には人の姿はなく、枕元に集まる僧の中の一人が大師に描き変えられている。

X―4「博陸参詣」(図21)も人物配置に異なる例である。博陸は関白の唐名であり、藤原道長の高野山参詣を表す段であるが、白鶴美術館本の構成は、奥院まで一步三礼して進んだという道長の姿を二度繰り返したものと解される。ところが延暦寺本は、この二人の道長を廟堂の前に並列して描いているので、画面上では、異なる二人の人物が同時に礼拝しているように見える。以上の例は、何れもおそらくは転写の際に生じた写し崩れと思われるが、特にX―4は、それが場面内容を歪めてしまった例として注目される。

残る一例はⅦ―6「大塔建立事」(図22)である。高野山に大塔を建てた後、引続き堂舎を建立したという事蹟であるが、延暦寺本は白鶴美術館本よりも多くの建物を描いている。ここでは、伽藍そのものを主要モチーフと見なしB1に分類した。

次に、B2の例を見てみよう。詳細は省略するが、異同の大半は従

者や見物人などの数が増減するものである。顕著なものを一例だけ挙げれば、Ⅳ―7「高雄灌頂事」(図23)では、列をなす僧が十四人増える一方で、路傍に座す見物人は四人減っている。また登場人物の多い段では、人物の配置にも異同が生じる場合が多い。例えばⅡ―6「入唐入洛事」(図24)では、合計人数には変化がないが、各人物は完全には対応し得ない。このほか白鶴美術館本にあるモチーフを変化させたり、新たに異なるモチーフを描き加える場合もある。これには、Ⅲ―8「大師擲三鉢事」、Ⅳ―8「隔河書額」、Ⅶ―8「権者自称事」(図25)、Ⅶ―11「東寺勅給」などが該当する。以上の例には、単純な写し崩れから意図的な変更まで種々の場合が含まれていると考えられるが、それらを一つ一つ分別することは困難である。

(三) 図様比較C

Cは基本的な図様がほぼ一致するものであり、四十八段が該当する。ただしB2では、背景となる建物や風景に生じた異同は無視したので、それらがここに含まれている。個々の説明は省略するが、建物の構造上の異同、山や樹木の表現の相違、そのほか人物の配置がずれて構図に緊張感がなくなったものなど、このような例は枚挙に暇ないほど多数ある。しかし、その大部分は転写の際に生じた写し崩れとして許容される範囲内のものであり、延暦寺本の図様が白鶴美術館本と相似関係にあることは明らかである。

(四) 延暦寺本の特徴と諸本への影響

右の比較により、両者の間には数々の異同があることが明らかになった。しかし、それは決して両者の連関を否定するものではなく、むしろ逆に、延暦寺本の図様が基本的には白鶴美術館本を踏まえたものであるということを示す結果となった。十巻を通覧しても、両者が全く異なるという例は皆無である。場面の内容に変更が生じるAの場合でさえ、画面上の異同は図様の一部に留まり、延暦寺本の図様は白鶴美術館本を基調としていた。B・Cについては言うまでもない。以上のことから、延暦寺本が白鶴美術館本から、あるいは白鶴美術館本そのものからではないにしても、それに近い位置の作品から派生した写本であることは間違いないと言えよう。

しかし一方で、A・Bの中には明らかに意図的と思われる異同が含まれていたのも事実である。例えばⅢ-2「大師御入壇事」・Ⅶ-6「大塔建立事」・X-6「高野山臨幸」におけるモチーフの追加や、Ⅳ-5「宗論事」・V-1「八幡約諾」における図様の一部修正などは、先行本の図様を単に転写するだけでなく、積極的に改変したものであるとして評価されよう。また、B2における周辺モチーフの異同や、ここでは無視した背景の異同、そのほか処々に見られる写し崩れは、他本との比較においては、系統整理のための重要な指標ともなる。

ただし、両者の間に見られる異同のすべてが、延暦寺本のオリジナルな変更であるとは限らない。この両者間に他の写本が介在する可能

性については、先にAに分類したⅢ-1「渡天礼拝釈尊事」で指摘した通りである。したがって上述の異同の中には、延暦寺本以前に生じた変更を継承したものと、延暦寺本におけるオリジナルな変更とが混在していると推定される。しかし、この問題は次章で論じることにして、ここでは白鶴美術館本と延暦寺本を対比させておこう。

さて、延暦寺本の重要性は、結論から言えば、その図様が後世の諸本に多大な影響を及ぼした点にある。例えばAの六例については、個人蔵本はV-2「稻荷契約」以外の五例、大蔵寺本は六例すべて、宝集寺本は欠失する第五巻を除く四例において、白鶴美術館本ではなく延暦寺本の図様を取り入れている（唯一の例外である個人蔵本の「稻荷契約」については次章で述べる）。同様にB1の十一例についても、右で指摘した異同に関しては、ほとんど延暦寺本の図様が継承されている。例外は、I-1「誕生事」で大師の父を欠くのは延暦寺本（図17）だけであることと、II-8「虚空書字事」・X-4「博陸参詣」では諸本の表現に相違がある程度である。また、B2の大半は登場人物の数や配置に関する異同であるが、これについては諸本でさらに異同が生じている場合が多い。しかし、例えばIV-7「高雄滝頂事」を見ると、延暦寺本（図23）で増加した十四人の僧は諸本でもそのまま描かれている。同様のケースは多々あり、B2についても延暦寺本の図様が優勢であると言える。最後のCについては詳述しなかったが、背景となる建物や風景に生じた異同に注目すると、やはり諸本の図様

は、白鶴美術館本ではなく、総じて延暦寺本に相似するように見える。右のことから、個人蔵本以下の三者は、白鶴美術館本よりも、それが変容した延暦寺本の図様と密接な関係にあると推定される。次章では、このことを踏まえて諸本の図様を検討し、それらの相互関係から、十巻本の転写の系統について考察することにした。

四 諸本の図様

(一) 個人蔵本

個人蔵本の図様は、前章の最後で述べたように、白鶴美術館本と延暦寺本のどちらかと言えば、総体的には後者により強く相似する。鹿島氏の分類に当てはめるならば、第三類に加えるべき作品のように見える。

しかし、本絵巻独自の特徴として、登場人物の増減が顕著であり、特に減少する場合が多いことが指摘される。また表現を簡略化する傾向も強く、例えばⅢ-9「着岸上表」では大師の行く手にあるはずの家並が、V-10「真如親王」では他本が御簾越しに表す大師の姿が、Ⅷ-3「仁王経法事」では東寺の南大門・中門の仁王像が、それぞれ省略されている。またX-6「高野山臨幸」では、行列の人数が減少するとともに、背景にも大きな変化が生じているが、この点については次節で述べる。

このような簡略化の結果、Ⅱ-1「天狗問答」では、事蹟内容とはかけ離れた図様が出来上がっている(図28)。天狗を退散させるために、大師が自らの形代を作って桶の洞の中に安置したという事蹟であるが、ここには、住房の中に座る大師というモチーフが二度繰り返さ

図28 個人蔵本 Ⅱ-1 天狗問答 (部分)

図29 個人蔵本 V-2 稲荷契約 (部分)

れているだけで、楠の洞も形代もないように見える。しかし白鶴美術館本や延暦寺本（図26）と比較すると、本来は右が天狗と問答をする生身の大師、左は安置された形代であり、その間に見える低い屋根は形代の前に設けられた拝堂の名残であることがわかる。¹⁴

右のことから、延暦寺本と個人蔵本の図様については、前者に先行性があることは明らかである。したがって、前者を簡略化したものが後者であるように考えられるが、この推定はV-2「稲荷契約」には当てはまらない。なぜなら、延暦寺本（図12）は先述の如く白鶴美術館本の第一場面を欠落するが、個人蔵本（図29）にはその第一場面が描かれているからである。この点に注目すれば、個人蔵本は延暦寺本から派生した写本ではあり得ないことになる。またIV-1「帰朝上表事」に登場する太宰大監高階真人は、白鶴美術館本と個人蔵本では束帯を着しているが、延暦寺本では水色の直衣に変わる（図27）。着衣の色や文様に関する異同は決して珍しいことではないので、前章ではCに分類したが、これも個人蔵本が延暦寺本ではなく、白鶴美術館本の表現を継承した例と言えよう。

さて、右の二例は、延暦寺本と個人蔵本の間には直接的な転写関係が成立し難いことを示唆する。しかし、この両者が白鶴美術館本に対し、数多くの異同を共有することも確かな事実である。したがって上記三者の関係については、白鶴美術館本以降に、延暦寺本と個人蔵本の共通の祖本となり得る写本（仮に甲本と称する）が、さらに詳しく

言えば、この両者が共有する図様を備え、なおかつ右の二点については、まだ白鶴美術館本の図様を伝えている段階の写本が存在したと推定される。

（二）大蔵寺本

大蔵寺本についても、先述の如く、延暦寺本の図様の影響は明白である。しかし、上述の三者何れとも異なる独自の表現も多く見いだされる。その最も顕著な例はII-1「天狗問答」であるが、楠の洞の中に大師の小さな形代を祀る図様は、他三者よりも事蹟内容に即した表現であることが注目される（図30）。またII-2「久米東塔心柱事」の第三場面では、他

の僧を先導役に仕立てるが、これも内容的に適切な変更である。¹⁵

このほか場面の内容には直接関係しないが、人物の配置や建物の構造に関する異同が頻出する。例えばI-1「誕生事」では、大師の父母が左右反転し、別室の二人の武士は馬小屋の右に移動する。4-3

(左へ続く)

図31 大蔵寺本 X-6 高野山臨幸 (部分)

(左へ続く)

図32 個人蔵本 X-6 高野山臨幸 (部分)

「救火災」では、構図全体が左右反転し、IV-6「槇尾寺」では、第一場面と第二場面が逆順になる。またI-5「明敏篤学事」では、建物の右端の不自然な部分が省略され、I-11「明星入口事」では、住房に付書院が加えられている。

右のことから、大蔵寺本の図様は延暦寺本に積極的に改変、時には修正を加えたものと言えそうであるが、実は、V-7「南円堂鎮」の第一場面に問題が潜んでいる。白鶴美術館本を見ると、この場面は五人で構成されているが、延暦寺本は一人欠いて四人となる(図13)。ところが、大蔵寺本は五人に戻し、例の金銅の宮(前章の図様比較A参照)が既に掘り出されているという点を除けば、人物の配置も動作もほぼ完全に白鶴美術館本に一致する。したがって大蔵寺本についても、延暦寺本との直接的な転写関係は成立し難いと言えよう。しかし、宮の発見後を表すという点は、白鶴美術館本に対する両者共通の異同であり、同様の事例がほかにも多数あることから、ここでも、両者に共通する祖本(仮に乙本と称する)の存在が想定される。ただし大蔵寺本のV-2「稻荷契約」は、延暦寺本と同じく白鶴美術館本の第一場面を欠落していることから、この異同を乙本に帰するならば、乙本は甲本よりも後に位置するものとなる。

次に、個人蔵本との関係を見てみよう。前述の如く個人蔵本は図様を簡略化する傾向があり、また大蔵寺本は右で述べたように独自の改変や修正を多く加えていることから、この両者間に全面的な転写関係

があり得ないこと明らかである。しかし、一部には、両者だけに共通する図様が見られる。例えばX-2「幡慶夢想」では、幡慶とその夢の中に現れた大師の向きが、大蔵寺本と延暦寺本で異なっているが、個人蔵本は前者に、白鶴美術館本と宝集寺本は後者に一致する。同様にX-3「遺跡影向」に登場する縁実は、大蔵寺本と個人蔵本では右向きに座っているが、他三者では左向きの立姿で表される。些細な異同ではあるが、それぞれの一致は偶然とは考え難い。またX-6「高野山臨幸」においても、行列の構成、その行列が険しい山道を登って行く様子（他本では平坦な道を進む）、奥院の瑞垣に二羽の鳥が止まることなどに、両者だけの共通性が認められる（図31・32）。ただし、大蔵寺本はここでも独自のモチーフ（輿の前の騎馬人物など）を追加しているが、それはさておくとしても、一方の個人蔵本が先述の如く登場人物を大幅に省略しているため、両者の図様を比較すると、大蔵寺本を簡略化したものが個人蔵本であるかのように見える。⁽¹⁶⁾またX-4「博陸参詣」については、先に諸本の表現が異なることを指摘したが、この場合にも、個人蔵本は大蔵寺本を簡略化したものという関係を当てはめることができる。

しかし、大蔵寺本（一四九〇年）が個人蔵本（一四七四年）に影響を与えたという図式には、制作の順序が逆転するという問題がある。ところが、鹿島氏によれば、金剛福寺・久保家分蔵本（一四一五年）は大蔵寺本と図様を同じくするということであるから、もし右の例に⁽¹⁷⁾

ついてもそうであるならば、大蔵寺本の図様の成立を応永二十二年（一四一五）まで遡らせることが可能となり、個人蔵本に影響を与えたのは金剛福寺・久保家分蔵本、あるいはその周辺の写本であったと推測することが許されるであろう。なお右のような例は第十巻に集中していることから、両者の関係は、この一巻に限られたものであったと思われる。

さて、大蔵寺本の図様は、このように白鶴美術館本、個人蔵本、さらには次節で述べるように宝集寺本とも、他には見られない二者間だけの共通性を持つており、その相互関係は極めて複雑である。

（三）宝集寺本

宝集寺本の図様は、上述の四者の中では、延暦寺本に最もよく相似する。しかし部分的には、より強く他者に相似する場合がある。例えば、Ⅱ―5「入唐着福州岸事」の第二場面は、椅子に座る唐人と虎皮の敷物に座る大師が向かい合う構成であるが、白鶴美術館本と延暦寺本には椅子も敷物もなく、同様の表現は個人蔵本だけに見られる。¹⁸⁾ またⅡ―6「入唐入洛事」では、長安に向かう行列の表現が諸本で異なっているが、個人蔵本と宝集寺本は、後者が前者の人物を一人欠くことを除けば完全に一致する。右の例は、個人蔵本と宝集寺本が系統的に近い位置にあることを示唆する。

一方、Ⅶ―8「権者自称事」は、大蔵寺本との共通性を示す例である。この事蹟も諸本で異同が多いが、モチーフの出入と配置を比較す

図33 宝集寺本 IV-2 賀春山生木

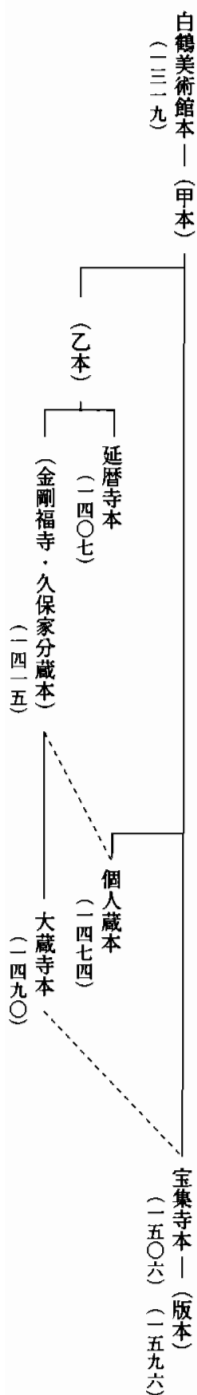
ると、この両者だけに一致が認められる。またⅨ―2「門徒雅訓事」については、かつて白鶴美術館本の図様に誤りがあることを指摘したが、¹⁹⁾ 延暦寺本と個人蔵本はその誤りを踏襲するのに対し、大蔵寺本と宝集寺本はともに修正した図様を描いている。¹⁹⁾ これらは、制作時期の先行する大蔵寺本が、宝集寺本に部分的に影響を与えたものと推定される。

次に、宝集寺本独自の異同と考えられるものを見てみよう。例えばⅡ―3「渡海祈願」の宇佐八幡宮では、他本が斜め向きに描く社殿を、宝集寺本は正面向きに捉える。またⅣ―2「賀春山生木」では、大師自身の向きは白鶴美術館本ではなく延暦寺本以下の諸本に一致するが、賀春明神の社殿については「渡海祈願」と同様のことが言える（図33）。さらにⅩ―6「高野山臨幸」においても、奥の院に至る風景の中に、水を汲む僧などの独自のモチーフが見い出される。

さて、右のような特徴に注目しながら、ここで版本の「高野大師行状図画」を見ると、画面が短く切り詰められる場合はあるにしても、登場人物の数も配置も、また背景となる風景も建物も、ほぼ完全に宝

集寺本に一致することに気付く。⁽²⁰⁾ 文禄五年（一五九六）に開版された版本は、「高祖大師秘密縁起」と十巻本「高野大師行状図画」を合採し、絵は後者を取り入れたものと位置づけられているが、⁽²¹⁾ と言う十巻本「高野大師行状図画」には、現存作品の中では宝集寺本を当てるのが最も適切である。以上のことから、宝集寺本が欠失する第五巻の図様を、版本を用いて推定することが可能であると考えられる。特に注目したいのはV-2「稻荷契約」とV-7「南円堂鎮」であるが、前者は白鶴美術館本、個人蔵本と同じく三場面を描く。また後者の第一場面は、筈の発見後を表す点は延暦寺本以下の諸本と同じであるが、登場人物は五人であり、この点では白鶴美術館本、大蔵寺本とのみ一致する。⁽²²⁾ 右の二例は、版本の図様が延暦寺本の直接的な影響下にあるものではないことを示唆する。おそらく宝集寺本についても同様であったと推定される。なお、版本第五巻のそのほかの段については特に問題はなく、上述の論旨に反する図様は見あたらない。

図34 十巻本「高野大師行状図画」の転写系統図(案)



(四) 転写の系統

個人蔵本、大蔵寺本、宝集寺本の図様について、その相互関係および白鶴美術館本、延暦寺本との関係を検討してきたが、上記五者の転写の系統を考察する上で、もう一つ忘れてならないのは、白鶴美術館本と宝集寺本が有する惣持院本の筆者目録である。この筆者目録の存在は、両者が同系統に連なる作品であることを保証するものであり、これを伝えた正当性に注目すれば、白鶴美術館本→宝集寺本の流れこそが十巻本の直系であると言える。⁽²³⁾ そして、この両者の間に認められる数多くの異同は、すべて転写の過程で生じたものと見なされる。

では、白鶴美術館本→宝集寺本を機軸として、他の諸本を位置づけよう。まず、延暦寺本は筆者目録を伝えていないので、明らかに傍系に位置する。個人蔵本も同様であるが、宝集寺本とのみ共通する図様があること、またV-2「稻荷契約」に注目すると、白鶴美術館本、個人蔵本、宝集寺本が同じ図様であったと推定されることから、延暦寺本よりは直系に近い位置にあると考えられる。次に、大蔵寺本

については、筆者目録がないこと、またV-2「稲荷契約」の図様は延暦寺本と同じであることから、やはり傍系に位置づけられるが、V-7「南円堂鎮」の図様の一部が延暦寺本ではなく、白鶴美術館に一致することから、少なくとも延暦寺本の下位に置くことはできないと考えられる。したがって、延暦寺本と平行する傍系に位置するものと推定しておきたい。なお金剛福寺・久保家分蔵本は、鹿島氏の分類に就けば、大蔵寺本の上位に置くことができるであろう。

先に、延暦寺本と個人蔵本に先行するものとして甲本、また延暦寺本と大蔵寺本に先行するものとして乙本の存在を想定したが、右の位置関係にそれらを組み込み、各作品の制作年代を考慮して構成したものが、図34の転写系統図(案)である(実線は全体的な影響を、点線は部分的な影響を示す)。このように考えると、前章で指摘した白鶴美術館本に対する延暦寺本の異同の大部分は、甲本あるいは乙本に帰すべきものとなり、延暦寺本独自の異同と見なされるものは、I-1「誕生事」における大師の父の欠落、またV-7「南円堂鎮」における人夫の欠落などごくわずかであったことになる。なお大蔵寺本と個人蔵本の間認められた部分的影響は、実際には大蔵寺本に先行する写本から個人蔵本への影響と見るべきものであるが、ここでは、それに該当する現存作品として金剛福寺・久保家分蔵本を当てた。ただし、これについては前述の通り未確認である。また、十巻本の直系ではないが、版本の図様は宝集寺本の延長線上に位置づけることができる。

さて、現存作品の図様を比較検討した結果から、諸本の転写系統について最も単純な図式を想定したが、実際には、今は失われた多くの写本が、系統図の作品間に引かれた線上に、あるいはそこからさらに派生していく傍系の線上に存在したものと思われる。甲本、乙本と仮称したものについても、一つの特定の作品と言うよりも、転写を繰り返した何本かの作品群とみる方がより適切であろう。それらの新たな出現を期待しつつ、現状での考察をひとまず終えることにしたい。

結 語

本稿では、延暦寺本、個人蔵本、大蔵寺本、宝集寺本、以上四者の概要を一覧した後、まず白鶴美術館本と延暦寺本の図様を比較して両者間の異同を明らかにした。次に、その結果を踏まえて他三者の図様を検討し、それらは何れも白鶴美術館本よりは延暦寺本に相似すること、しかし延暦寺本から直接派生した転写本とは考え難いことなどを指摘した上で、上記五者の転写系統を図34の如くに想定した。

ところで、図34からわかるように、転写の系統は枝別れするだけでなく、時として融合する場合もある。では、このような相互関係を可能にしたのは、一体どのような制作環境であったのだろうか。本稿では、この点に言及することができなかったが、最後に一つの見通しを示しておこう。ここで注目されるのは、十巻本の諸本には惣持院本を

はじめとして親王院本、桜池院本、宝集寺本など高野山と関係する作品が多いことである。断定はできないが、延暦寺本と個人蔵本についても高野山内で制作された可能性が考えられる。また、惣持院本の奥書には門外不出が唱われているが、同様の主旨は延暦寺本と大蔵寺本にも認められる。大師伝絵巻は重宝として扱われ、たやすく寺外に借り出せるものではなかったであろう。このような事情を勘案すると、先の問題を解く鍵は、やはり高野山にあるように思われる。空海の別称は多いにもかかわらず、空海伝絵巻でも弘法大師伝絵巻でもなく、「高野大師行状図画」を原題としている点に、既に十巻本の、またその母胎である六巻本の高野山中心主義が表れているが、おそらく転写の過程でも、高野山を中心舞台とする展開があったものと推定される。それを明らかにするための資料はまだ乏しいが、今後の検討課題としたい。

注

- (1) 梅津次郎 論文1「池田家蔵弘法大師伝絵と高祖大師秘密縁起」、論文2「地蔵院本高野大師行状図画—六巻本と元応本との関係—」、論文3「東寺本弘法大師絵伝の成立」、「美術研究」第七八・八三・八四号、昭和十三年。「絵巻物叢考」(中央公論美術出版社、昭和四十三年八月)所収。
- (2) 注1梅津論文1・2。
- (3) 長谷宝秀「弘法大師絵伝目録」「弘法大師行状絵詞伝」弘法大師一千百年御忌事務局、昭和九年。
- (4) 梅津次郎「弘法大師絵巻の諸本について」「弘法大師行状絵巻」東京美術昭和五十六年。梅津次郎編「弘法大師伝絵巻」角川書店、昭和五十八年。
- (5) 宮島新一「巨勢派論(下)—平安時代の宮廷絵師—」「仏教芸術」第一六九号、昭和六十一年。
- (6) 鹿島蘭「弘法大師伝絵巻」十巻本について」「MUSEUM」第五一四号、平成六年。
- (7) 拙稿「三大寺家旧蔵「高野大師行状絵」考—逸翁美術館本を中心に—」武田恒夫先生古稀記念会編「美術史の断面」所収、清文堂出版、平成六年刊行予定。
- (8) 拙稿「弘法大師伝絵巻の諸問題」『国際交流美術史学会第八回シンポジウム 説話美術』国際交流美術史研究会、平成二年。
- (9) 十巻本の完本としては、このほか六地藏寺本(天文十五年、一五四六)が知られるが、構成にも図様にも独自の改変が顕著であり、異本的な正確が強いので除外する。これについては、別の機会に改めて論じることにした。
- (10) 調査時には、糊が剥がれて離脱した料紙や錯簡があったが、その後、修理されたと聞くので、この点については省略する。
- (11) ただし白鶴美術館本では、「左衛門尉」の「尉」の字が落とされ、また「惣持院」が「惣分中」に改竄されている。注4梅津論文参照。

(12) 白鶴美術館本については、注4梅津編「弘法大師伝絵巻」のカラー図版を参照されたい。

(13) この点については既に指摘したことがある。注8拙稿六十六頁。

(14) 白鶴美術館本と延暦寺本の図様については、注8拙稿六十八頁参照。

(15) 第三場面は、詞書の「夢の中に人ありて告げていはく」に対応するものと考えられ、大師が先に立つ図様よりも、「人」に先導される図様の方が適切であると思われる。なお白鶴美術館本の図様には、他の事跡の図様が竪入するという問題があるが、その点については、注8拙稿六十八―六十九頁参照。

(16) 逆に、個人蔵本を修飾したものが大蔵寺本であると考えることはできない。なぜなら、個人蔵本が省略したモチーフの中には、延暦寺本と大蔵寺本に共通する人物が含まれているからである。

(17) 注6鹿島論文三十三頁。

(18) 大蔵寺本には、椅子はあるが虎皮の敷物はない。また、第一場面にも独自の異同があり、宝集寺本とは異なる図様になっている。

(19) 注8拙稿七十四頁の注12参照。

(20) この事実は本稿執筆中に気付いたものである。版本については、詞書の問題も含めて別の機会に論じることにした。

(21) 注1梅津論文1。

(22) なお個人蔵本では、登場人物は三人に減少する。しかも、篋を持つ男以外の二人は、延暦寺本にも描かれている人夫の中の一人を二度繰り返し返した

ものである。

(23) 白鶴美術館本が惣持院本そのものでない場合には、惣持院本から白鶴美術館本の系統と宝集寺本に連なる系統が別個に派生した可能性も考慮されるが、ここでは、できるだけ単純化するために白鶴美術館本を宝集寺本の祖本に当てた。

(付記)

本稿をなすにあたり、所蔵者各位ならびに延暦寺国宝殿の中野英勝氏、同じく三井田妙久氏、奈良国立博物館の梶谷亮治氏、白鶴美術館の山中理氏、摂南大学国際言語文化学部助教授岩間香氏のお世話になりました。また故梅津次郎先生には、宝集寺本の調査に同行させていただいたことをはじめとし、数々のご教示を賜りました。末筆ながら心から御礼申し上げます。